フィールドワーク心得帖

第26回　岩﨑葉子

歓迎！「公私混同」
―イランのフィールドワーク―

社会科学的調査の方法論としてのフィールドワークは、「仮説の立て方」「調査許可の取り方」「インタビューの仕方」「メモの取り方」「データ整理の仕方」などのステージごとに、今日ではかなり体系だった解説が施され、調査の技術的な側面を大いに強化するようになっている。一方で、この種のフィールドワークの基本的ノウハウが多くの研究者の間で共有されるようになってさえ、その実践の様相はおのずと千差万別である。それはとりもなおさず、踏み込むフィールドがそれぞれ異なるからだ。東アジア、東南アジア、アフリカ、南米とそれぞれの土地で、人に話を聞いたり調査をさせてもらったりする際に「押さえるとよいツボ」は一様ではない。以下では、筆者がイランで調査をするときに「これが調査をスムースにする」と感じているツボをご紹介したい。

筆者はイラン商人の間のインフォーマルな慣行・しきたりなどの経済学的な分析に関心があり、現役の商人やビジネスマンから彼らの日常業務について聞き取り調査をするのがフィールドでの主たる作業内容である。聞き取った内容の裏取りのための文献資料集めは別として、おおむね民間企業のおじさんたちへのインタビューが調査の中心だ。

初めて会う相手に、根掘り葉掘り商売の話を訊くわけであるから、先方も警戒しないわけがない。最初のインタビューは、いかにイラン人が群を抜いて社交的であるとはいえ、その場に否応なく緊張感がみなぎってしまうものである。おじさんがリラックスして自由に話してくれるように、なんとかこの空気を打破せねばならない。

そこで試みに、出がけに子どもがぐずったために少し時間に遅れてしまった、という言い訳をしてみる。日本でこれをやったらただちに落第であるが、イランは違う。「ほう、お子さんはおいくつ？」と相手は嬉しそうに身を乗り出す。テヘランには子連れで赴任していること、単身日本に居残った夫が時折やってくること、子どもが宿題をやらずに手を焼いていること…などプライバシーを全開し家族構成を披露する。この一見仕事の場にふさわしくない自己紹介が、相手の胸襟を開かせる突破口なのだ。「テヘラン大学の客員研究員」だと言うより、「インタビューを終えたら夕飯の買い物をしなければ」と言ったほうが効果的である。仕事の場面で家庭の話をすることに何らのタブーもない。むしろ相手はここでようやく筆者を「いっぱしの社会人」として認知し始めるのである。

家庭責任をきちんと果たしているか否かで人の評価が分かれるのは、多かれ少なかれどこの世界にもありそうな話であるが、イランは家庭の範囲がたいへん広く設定されているのも特徴的だ。被調査者のイラン人から「おまえの両親はどこに住んでいるのか」「どれくらい頻繁に行き来するのか」といった趣旨の質問を受けることがある。おかげさまで老親は健在で、比較的近所に住んでいること、月に数回（ほんとうはそんなに多くないが）は様子を見に行くことなどを筆者から聞き出した相手は、じつに満足そうに、「そうか、感心、感心！」「月に数回は少ない、ぜひ毎週行ってやれ」と微笑む。また筆者の親族はたまたまほとんどが近隣に居住しているため正月には本家へ集合するのが恒例なのであるが、この話を誰より喜んで聞いてくれるのはイラン人である。「日本はすっかり欧米化したと聞いていたが、あっぱれ伝統的美徳が息づいているのだな！」と大げさに感激してくれる。

近しい肉親を含む親戚づきあいを大事にしている人、というイメージがなぜこうもイラン人のハートに響くのかは分からないが、これで調査が格段にやりやすくなることは間違いがない。それはイラン社会における

いわさき　ようこ／アジア経済研究所　中東研究グループ

専門はイラン経済制度史。フィールドワークに史料・文献調査を加味し、イラン独自の経済慣行やシステムを分析する。海外調査員として2009年から2011年までテヘラン在住。

人としての「まっとうさ」の証左だからである。逆に、プライベートより仕事を優先してもけっして褒められない。イラン人はと言えば、日本人が閉口するほど親戚づきあいが密で、それこそ年がら年中つるんでいる。それでこんな「公私混同」な演出が、意外にも彼らから最初の信用を勝ちとる術なのである。

さて筆者は、一定の期間をおいて同じ被調査者に繰り返し会いに行くことが多い。これは本来「特定の商慣行が時系列で見るとどのように変化するか」といった情報を得るためなのだが、当面その被調査者にはこれといった質問がないときでも、極力時間を割いて会いに行くようにしている。というのも、こうした一見「無目的」な訪問がイランでの人脈作りには不可欠だからだ。

久々に尋ねた商人の店先で、日本から買っていった土産を渡しつつ、お茶を飲んで世間話をする。このときいくら仕事がらみで知り合った相手だと言ってもいきなり「商業省から出たこないだの通達ですけどね」などと無粋な話題を切り出してはいけない。その代わりに日本の家族や住んでいる町の写真を何枚か見せ、子どもは何歳になったとか、最近いとこが結婚したとか、近所にこんな安い店ができたといった、日本であれば親しい友人にさえ遠慮してしまうようなどっぷりプライベートな近況を報告するのである。もちろん先方は筆者の子どもやいとこに直接会ったこともなく、今後会うこともないだろう。それはいっこうかまわない。この手の内輪の話題を共有することが肝要なのである。

こちらもどんどん訊いてよい。それは個人情報ですなどとけちなことを言うイラン人はいない。「郷里はどこか」「故郷のご母堂はお元気か」「おたくのご子息は何を勉強しているのか」というようなことを訊くと先方は嬉しそうに、姉妹の嫁ぎ先の姑の話までしてくれるが、この情報を忘れずにいて、その次の（ひょっとしたら数年後の）訪問の際に「息子さんは無事に卒業したか」などとふれば、心証はさらに良くなる。

実際には筆者と被調査者のおじさんとは、仕事場でしか顔を合わせないのだが、こうしたやりとりを通じてあたかも「家族ぐるみのおつきあい」をしているかのような雰囲気が醸成されれば、人脈づくりはひとまず成功である。おじさんは同業者を芋づる式に紹介してくれるし、ことによると業界の大物にも引き合わせてくれる。こうした縁故には、業者組合の窓口や監督官庁の担当者といったオフィシャルなルートを通じても、門前払いかたらい回しにあうだけでいっこうにたどり着けないのだ。

いったいに、イランでは所属する組織名や職業だけでは仕事上の信用は容易に得られない。むしろ「個人的な友達」になることが大事で、それには家族や親戚を巻き込んだ「公私混同」が王道なのである。社会的信用のあり方が日本とは異なっているので最初は戸惑うことが多かったが、郷に入っては郷に従え。筆者もテヘランでだけは、人に見せるための家族の写真を持ち歩いている。

仮説の設定、質問の準備、インタビューの実施などなど、方法論としてのフィールドワークの基本はどこへ行っても同じである。だからマニュアルもたくさんある。しかし未知の土地へ乗り込み、現地の風景のなかで人々と交わりながら、自分の研究のための情報を採集して歩くフィールドワークを成功裡に導くコツは、マニュアルには載っていない。研究者が自分のフィールドから学ぶしかない。以前、南米研究者の同僚が「ラテンアメリカはお色気たっぷりのキメキメファッションでないと一人前の大人の女性と認知されない」ので、調査のときは訪問先に応じてパンプス、バッグ、スーツとそろえねばならず費用がかさむと言っていた。イランは髪と身体の線を隠すヘジャーブの遵守が必須だが、頭に巻くショールもコート状の上着も事実上着たきりスズメであることを思い、筆者はひそかに「なんて安上がり」と喜んだ。オリジナルな情報を引き出すには被調査者との信頼関係を築くことが必要だが、そのためには「相手が何を大事に考えているか」を知らねばならない。多様な価値観に直面して、自分自身も一皮むける絶好の機会である。